



小池 光選

槍投げの槍は選手の手を離れ銀の尾びれをひらめかせ飛ぶ
三田市 藤原栄美子

【評】槍投げという競技はたしかにこんな具合である。投げられた槍は震えつつ飛ぶ。それを「銀の尾びれ」と見立てたところが正確にして斬新だ。この前の世界陸上か。

臨終の妹の髪をたかすたかすたかす母は手櫛で
松山市 森岡 雅信

【評】遠い昔の記憶か。しかし今でも忘れられぬ。早世の妹の髪を母は手櫛で梳かした。何度も何度も梳かした。わが子を喪った母のかなしみが切々と伝わる。

一年はあつといふ間に過ぎゆきて洗濯機の残り一分長し
藤枝市 北泊あけみ

【評】時間というものは客観的なもので、実は主観的である。一年が過ぎるのあつという間だが、洗濯機の前の一分は実に長い。

亡き父の作業着まといし古案山子刈田に焼きぬ離農決意し
北上市 佐々木清志

「うちそうさまおいしかつた」を毎食後さりと云へる齡となりぬ
浜浜市 久野 茂樹

ホットケーキ焼くたびに思う孫のこと良き看護師になれよと願う
西条市 山本美知子

草取りに追はるることのなかりし日わたしは草に親切だつた
岡山市 岩藤由美子

「半どん」とふ言葉懐かしく聞きあたりそんな時代を勤めし我等は
横浜市 芳垣 光勇

もくせいの香りにつられ二分だけ遠回りする駅への道を
東京都 大室 英敏

朝顔の支柱に蜻蛉が止まりをり声をかくれば吾を見て居る
市川市 安田 恭子

栗木 京子選

退職自分で決める時間割り今日用がある夫のしあわせ
静岡市 榎守 美鶴

【評】退職してしばらくは、予定に縛られない日々を満喫した夫なのだろう。だが、やがて「今日用がある」とこの喜びを実感した。「時間割り」という表現に温もりがある。

百歳の母は医師から趣味聞かれ短歌をちよつとそれ我のこと
横浜市 杉本 恭子

【評】娘の趣味を拝借して返答した母。茶目つ気たぶりの姿が想像できる。「短歌をちよつと」の「ちよつと」という謙遜した口調が達者。結句の作者の突っ込みも楽しい。

愛猫の故郷は海 廃船に捨てられし日の記憶のありや
対馬市 乙成 弥生

【評】廃船に置き去りにされていた猫。今は作者の家族になつてゐる。「故郷は海」というフレーズから爽やかな情感が伝わる。

この夏の異変は稲刈りする前に早ツツバメがいなくなりしこと
磐田市 坂部 哲之

近頃のテレビに我が地の名前出る暑さ番付関係あたり
小田原市 杉崎 充

小鉢小皿二つずつにて事足りるままと楽し老いのあけくれ
川崎市 磯 首澄

日帰りのツアーで帰宅が遅くなり見慣れた街の夜の顔見る
所沢市 杉本 葉子

久々に実家の墓参 父に酒を母には花とおはぎを供ふ
さいたま市 大塚 数子

孫達と座敷の床が抜けるほど騒ぎ走った夏は遠のく
新発田市 本田 政嗣

足首まで浸かる深さよ雨の日に改めて知る歩道のへこみ
三原市 天崎 千寿

依 万智選

メイク動画を見ながら馬車に乗って見て見終わった時カボチャに戻る
東京都 大岩 真理

【評】魔法のように美しくなつてゆく動画を見ながら、自分もシンデレラになるような錯覚を感じる。でも、動画の後の現実には変わらなまま。シンデレラになぞらえながら、お城の舞踏会には行っていないところがリアルだ。

改札のあなたの影を踏みつけて上京するなと心が叫ぶ
小諸市 藤 雪陽

【評】影は、いくら踏んでいても、するりと行ってしまう。それなのに「踏みつけて」いるのだ。行動にも声にも出せないせつなさ、ひしひしと伝わってくる。

高層ビル群見あげれば今も思ひ出す僕が墓場の蟻だつたころ
東京都 浅倉 修

【評】墓場の蟻とは、人生のどん底だろう。高層ビルと墓石の重ね合わせが効いている。さんねんないきもの事典を揃えてる整形外科に骨を見られる

鬼のままなり 東京都 無地ムジカ

夕方のチャイムに散った子どもらの一人は今も食べ終えたアイスの棒を振り上げて指揮したくなる秋分の空
横浜市 富尾 大地

今でも思う 多田木まさのり

十数年前の私に向けた眼を遺影の祖父から受け取っている
東久留米市 中里 正樹

火を消したあととはほんのり焦げくさい大人の恋はアロマキャンドル
大和郡山市 大津 穂波

まごころは「学生街の喫茶店」君には孫が何人いますか
横浜市 紺屋小町

東京都 青木 公正

黒瀬 珂瀾選

光りつつ糶摺機より出でし米を袋に入れてわが名を記す
匝瑳市 椎名 昭雄

【評】今年は米不足なんだと大騒ぎでしたが、農家はどなたも一生懸命。そして、米を出荷する時、農家の誇りは輝きます。堂々と名を記し、自信をもって送り出すのです。

どれほどの人見送れば吾もまた旅立つものか鰯雲見る
川崎市 北沢 圭人

【評】秋の空を鰯雲が流れてゆく。それは、無数の小さな命が天空を過ぎ去るようにも見える。生きるとは、先に死ぬ命を見送り続けることでもある。自分が死ぬその日まで。

真夜中に水道水を飲むように各駅停車の駅名を読む
市原市 十条 坂

【評】真夜中に水を飲んで一息つくように、一つ一つ止まる駅の看板を読んで時を刻むのでしょう。あせらず進む各駅停車の時間。

大谷の勝ちを消したる中継ぎの尻を優しく叩く内野手
三郷市 小村 高介

がらがらの消化試合をだらだらと観る胃薬のもう要らぬ秋
長岡市 三月 とあ

慣れぬ手に大根間引く裏畑に雨の香含む風の騒立つ
青森市 安田 湊子

柿の実が豊かにゆたかに垂れてる昨日の嘘を許しておくれ
東京都 新美喜代男

樹上から白鷺が二羽飛び立って秋空深く人よ愛せと
宇都宮市 津布久 勇

正座してつぶさに今日を振り返る習ひとなりて湯につかりをり
さいたま市 小平 英治

秋暑し手押しポンプに水注ぐ「誘い水」とはゆかしき言葉
大和郡山市 四方 護